資料

感情が会話行動に与える影響および
相手の感情による調整効果¹藤原 健 大阪大学大学院人間科学研究科²
大坊郁夫 大阪大学大学院人間科学研究科Moderated effect of partner's affective state on the influence of affect on
message choice and free descriptionKen Fujiwara (Graduate School of Human Science, Osaka University)
Ikuko Daibo (Graduate School of Human Science, Osaka University)

This study examined the influence of affect on conversation behavior and moderated effect of partner's affective state on the influence. Previous studies have focused on how conversation behavior is influenced by one's affective state. This study examined whether the relationships between one's affective state and ranking message (Study 1) or free description (Study 2) would change through the partner's affective state, in addition to previous studies that considered only the main effect of one's affective state. Through the two studies, vignette experiments were conducted and partner's affective state was represented using facial expressions (smile or frowning face) in abstract paintings. In Study 1, 158 undergraduates prioritized four categories of message (edification, disclosure, question, and acknowledgement). These were extracted from Verbal Response Modes (Stiles, 1992) for five contexts composed of five categories including four that were the same as above and another, "non-message". In Study 2, 42 undergraduates provided free descriptions for the same five contexts. As a result, although there were few significant differences of correlation coefficients between facial expressions in study 1, there were some significant differences in Study 2. These results demonstrated the benefit of considering influences of dyadic combination of affective state on conversation behavior.

Key words: positive affect, negative affect, partner's affect, vignette experiment, Verbal Response Modes

本研究の目的は、話者の感情が会話行動に与える影響について検討した上で、さらにその影響に対して相手の感情がもつ調整効果について検討することである。そのために、場面想定法を用いた探索的な検討を行う。これにより、感情が会話行動に与える影響としての“話者の感情状態”の効果に加えて、相手の感情状態を踏まえた“話者間の感情状態の組み合わせ”の効果を検討していく。

従来の感情研究において、会話行動に対する感情の影響を実証的に検討した研究は多くはない。これまでの実証的研究において、会話行動は実際の会話場面から逐語記録化され、それぞれの会話行動間の構造的関連が検討されてきた (e.g., 小川, 2008)。本研究では小川 (2008) において用いられた発話カテゴリーの Verbal Response Modes (VRM: Stiles, 1992) を用いて検討を行うこととする。VRM (Stiles, 1992) は発話の機能に着目して考案されており、会話のやりとりの中で他者からの働きかけに対してどのように反応するかという点からカテゴリーが設定されている。VRM (Stiles, 1992) には発話内容が話者の経験に基づくものかどうかという Source of experience 軸と、話者の経験を推測した上での発話かどうかとい

Correspondence concerning this article should be sent to: Ken Fujiwara, Graduate School of Human Science, Osaka University, 1-2 Yamadaoka, Suita-shi, Osaka 565-0871, Japan (e-mail: fujiwara@hus.osaka-u.ac.jp)

¹ 本研究の一部は日本感情心理学会第18回大会 (2010年) で発表された。

² 現所属：大阪大学大学院人間科学研究科・日本学術振興会

Table 1
VRMの発話カテゴリー (Stiles, 1992より作成, 括弧内は原文)

Source of Experience	Presumption about Experience	Frame of Reference	
		Other	Speaker
Other	Other	反射 (Reflection)	解釈 (Interpretation)
	Speaker	応答 (Acknowledgment)	質問 (Question)
Speaker	Other	確認 (Confirmation)	指示 (Advisement)
	Speaker	情報 (Edification)	開示 (Disclosure)

う Presumption about experience 軸, 話者の観点からの発話かどうかという Frame of reference 軸の3軸が設定されている。これら3軸の組み合わせによって“情報”, “開示”, “質問”, “応答”, “確認”, “指示”, “解釈”, “反射”という8つのカテゴリーが設けられており, カテゴリー間に明確な定義があることも長所といえる (Table 1)。小川 (2008) によれば, この中でも“確認”, “指示”, “解釈”, “反射”の4カテゴリーは初対面同士の会話場面ではほとんどみられないことも明らかになっている。この4カテゴリーは Presumption about experience 軸が Other となっており, 関係の初期段階の会話で相手の経験を推測して発話を行うことが容易でないためであろうと指摘している。

さらに, 機能的視点によりカテゴリーが設定されていることから, たとえば一方の話者が“質問”を行った場合に相手は“情報”を提供するといったように, カテゴリー間の関連が読み取りやすいという長所がある。このような質問—返答の構造は隣接ペア (adjacency pairs) といい, 定式化された発話ペアとして指摘されている (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974)。他には挨拶に対する挨拶や, 呼びかけに対する返事なども指摘されている。VRM (Stiles, 1992) は隣接ペアを解析する目的で作成されてはいないため全ての隣接ペアをカテゴリー間の関連として解釈することは困難であるが, 質問—返答の構造は対称構造の関係として布置・解釈することができる。つまり, Presumption about Experience 軸の Speaker に着目すれば, “質問”は話者のものではない経験や知識について (Source of experience: Other) 話者の枠組みで行う発言 (Frame of reference: Speaker) となる。これに対して“情報”は話者 (二者間会話の文脈ではもう1人の話者, つまり会話相手) のもつ経験や知識について (Source of experience: Speaker) 話者の枠組みでなく行う発言 (Frame of reference: Other) として解釈される。こうした会話構造上の頑健なつなが

りに対しては感情の影響はみられにくいと考えられるが, どのような会話行動が感情の影響を受けるのかについて実際のデータに基づいて検討した研究はほとんどないため, 検討する必要があるといえよう。

また, 従来の感情研究では行動的側面への影響を検討する際, 主にその焦点を個人に当てる傾向にあったといえる。たとえば和田 (1986) では, 面接場面を対象として対人感情である好意の強さと自己開示の増加が関連することを示している。この研究では面接者が実験協力者であり, 分析の焦点は被面接者としての参加者の行動がいかに参加者自身の感情状態に影響されるかであった。こうした研究は, 自身の感情状態に影響された個人がいかに振る舞うかについて実証的な知見をもたらしてくれる点で重要である。

しかし, 感情が会話行動に与える影響を検討するためには, 一方の話者にのみ重点をおく個人焦点の枠組みだけでは十分ではないと考えられる。たとえば, 重要な試験に失敗してネガティブな感情状態になっているときを考える。ネガティブ感情は会話の回避との関連が指摘されることから (Forgas, 2002), このときの話者は落ち込み, 口数が少ないことが予想される。このとき, もし会話した相手が同様に失敗してネガティブな感情状態にあった場合には共有などが起こり結果的に会話が弾むようになることも考えられる。しかし反対に, 会話相手が試験に成功してポジティブな感情状態にある場合には会話はまず弾まないであろう。つまり, ネガティブ感情を抱いていた個人の会話行動は相手の感情状態次第で全く異なるものになる可能性があるといえる。これらの容易に想像される日常例は, 対人コミュニケーション場面において会話行動に影響するのは必ずしも自身の感情だけではなく, 会話相手の感情についても考慮する必要があることを示しているといえよう。

これに対して, 先行研究の中にも会話者双方の感情を対象としたものがわずかながらみられる。Berry & Hansen (1996) では初対面の二者間会話

を、Carnevale & Isen (1986) では対人交渉課題を行う上で、一方の話者のみではなく二者の感情に着目した検討を行っている。Berry & Hansen (1996) の研究1では特性としての感情に着目しているものの、PANAS (Watson, Clark, & Tellegen, 1988) を用いて二者の感情得点の平均値を算出し、二者のポジティブ感情得点 (PA 得点) の平均値の高さが二者間のコミュニケーションの質の高さと関連することを指摘している。また、Carnevale & Isen (1986) では交渉課題を行う際に二者共にポジティブ感情の誘導操作を行うことで、二者間に協調的な交渉が行われて互いの利益が増すことを示した。これらの研究は、個人がいかに自身の感情に影響を受けるのかという従来の視点ではなく、対人コミュニケーションを行う二者の感情を対象とした点で示唆的である。

しかしながら、二者の感情を対象として会話のプロセスや会話行動を検討したこれらの研究も、話者間の感情の組み合わせという視点においては特定の組み合わせのみ、つまり、互いが類似した場合 (特にポジティブ感情について) のみを扱っている。これに対して Daibo (1981) では、会話行動の活性化には話者間の特性不安の落差が影響することを指摘している。本研究では話者間の差異に着目した Daibo (1981) の視点を参考に、話者間の感情状態に差異がある場合についても検討を行う。さらに、差異の有無だけではなく、話者のポジティブな感情状態に対して相手がネガティブな感情状態である、もしくは反対に話者のネガティブな感情状態に対して相手がポジティブな感情状態であるといった感情価の識別をした上での検討を行う。これにより、会話行動に対する影響について参加者双方の感情を対象とした包括的な検討が可能になると考えられる。

ただし、それには克服すべき問題が存在する。それは、双方の感情状態を誘導するという手続き的困難さである。これは感情誘導の際の様々な注意点 (高橋, 2002) に加えて、感情経験の個人差 (Larsen & Diener, 1987; Kuppens, Oravecz, & Tuerlinckx, 2010) が原因として考えられる。つまり、それぞれの話者に対して特定の感情状態を誘導するという手続き的困難さのために、話者双方の感情の組み合わせによる会話行動への影響は検討が難しくなっているのである。

そこで本研究では、表情画を用いた場面想定法を採用することで感情誘導の手続き的困難さを避け、話者双方の感情の組み合わせによる会話行動への影響についての検討を試みる。話者の感情状態については質問紙を用いて測定を行う。これに対して相手の感情状態の操作として表情画の提示を行う。表情画を用いた理由は、第一に表情が一般的に感情状態を表す (Ekman, 1992) ためである。Ekman & Friesen (1971) では表情が表す感情については一般的に識別

率が高いことが示されている。このとき使用された表情は6つ (幸福, 悲しみ, 怒り, 驚き, 嫌悪, 恐れ) であったが、大まかにポジティブな表情かネガティブな表情かだけを判断する場合にはさらに識別率が高くなることが予想される。そのため、相手の表情を操作することで話者に対して相手の感情状態を明示することができるようになるといえよう。第二には、抽象度の高い表情画として提示することで写真のように特定の個人の顔による影響が統制されることによる。こうした操作は、現実場面における会話相手の感情状態を操作したとはいえないものの、表情画を通じて相手の感情状態が少なくとも話者にとって把握可能となる。そのため、話者の会話行動に影響する要因としての感情の組み合わせを確実に設定することができる。しかし一方では、会話行動を検討する際に場面想定法を採用すること自体についての短所も挙げられる。それは、会話行動に伴う抑揚や強調などの近言語的な特徴や会話の展開といった時系列的な検討が困難になってしまうことである。このような限界を含む一方で、従来の感情研究においてはまだ会話行動と感情の関連を扱ったものが少ないという現状も指摘できる。そのため、ある程度の制限がかかるとしても基礎的な知見の提出をすること自体に一定の意義があるといえよう。

このように、本研究では会話行動は自身の感情状態によってのみ影響を受けるのか、あるいはその影響に対して相手の表情が調整効果をもつのかを探索的に検討する。これにより、会話行動に対する“話者の感情状態”の効果、さらには相手の感情状態を踏まえた“話者間の感情状態の組み合わせ”の効果を検討する。具体的な方法としては、場面として初対面で同性の他者との会話場面を設定し、VRM (Stiles, 1992) を用いて会話行動の指標を作成する。その上で、与えられた発話カテゴリーに対する順位付け (研究1) と自由記述による回答 (研究2) を用いて検討を行う。

研究 1

研究1の目的は、話者の感情状態が発話カテゴリーの順位付けに与える影響について検討し、その上でさらに相手の感情状態による調整効果を検討することである。具体的には、第一の基準として自身の感情状態と VRM (Stiles, 1992) に基づく各発話カテゴリーの順位付けについて有意な相関関係を確認する。そしてその上で、第二の基準としてそれらの相関係数が相手の表情間で有意に異なるかを探索的に検討する。なお、文脈の無い状態でのカテゴリー選択は困難であるため、本研究では相手からの発言 (以後、提示されたメッセージとする) を文脈とし、これに対する反応として発話カテゴリーの順位付けを測定した。

Figure 1. 研究1における回答様式

方 法

調査対象者 関西地方の男女大学生183名のうち、欠損値のあった者を除く158名（男性54名、女性104名）を対象とした。男性は平均年齢20.1歳（ $SD=0.9$ ），女性は平均年齢20.0歳（ $SD=1.0$ ），全体では平均年齢20.0歳（ $SD=1.0$ ）であった。調査は2009年11月下旬に実施した。

手続き 最初に、対象者には感情状態と社会的スキルの測定尺度に回答するよう求めた。次に、初対面で同性の他者と会話している場面を想定するよう求めた後で“以下のように他者が発言したとき、あなたはどのように反応しますか。”と紙上で教示し、VRM (Stiles, 1992) の各カテゴリーについて順位を付けるよう求めた。その際、複数の反応を一度に行うときの順番（たとえば、質問の後に続けて情報をいうから1, 2という順序を割り当てる）ではなく、1回だけしか反応できないときの優先順位を書き込むよう求めた。なお、提示されたメッセージは表情画の横に提示した。また、順序を書きこむ括弧の横に“情報”，“開示”，“質問”，“応答”の順で回答カテゴリーを提示し、その例についてはそれぞれの回答カテゴリーの横に括弧つきで提示した（Figure 1）。感情状態と社会的スキルの測定尺度や表情画，および提示されたメッセージ，回答カテゴリーとその例については後述する。

感情状態と社会的スキルの測定尺度 回答時の対象者の感情状態を測定するために多面的感情状態尺度の短縮版（寺崎・古賀・岸本，1991）の活動的快，非活動的快，抑うつ・不安，倦怠の4因子を用いた。これらを用いたのは感情が一般的に感情価と覚醒の二次元から捉えられる（Russell, 1980）ためであった。各因子の平均値を分析に用いた。また、本研究では社会的スキルを測定した。これは、感情によるコミュニケーション行動への影響は社会的スキルの程度によって異なる（藤原，2010；藤原・大坊，2009）ことによる。つまり、社会的スキルが高い者は低い者に比べて感情とコミュニケーション行動の関連が弱まる傾向にあることが明らかになっている（藤原，2010）。もし群間に社会的スキル得点の有意差が生じていた場合、感情状態と会話行動との関連を比較したとしても相手の表

Figure 2. 相手の表情画（左が笑顔，右がしかめっ面）

情の効果と社会的スキルの効果を弁別できなくなることが予想される。このような交絡を防ぐためにもあらかじめ群間で社会的スキル得点に有意差がないことを確認する必要がある。そこでKiSS-18（菊池，1988）を用いて社会的スキルを測定し、その合計値を分析に用いた。

相手の表情（感情状態） 相手の感情状態を表す表情については、Yamada (1993) と渡邊・鈴木・山田 (2006) を参考に口部傾斜性を操作した表情画として作成した。相手のポジティブな感情状態を表すために笑顔を、また、ネガティブな感情状態を表すためにしかめっ面を設定した（Figure 2）。各対象者につき1つの表情画を割り当てた。

提示されたメッセージ，および回答カテゴリーとその例 会話の文脈を設定するために提示されたメッセージと、対象者が順位付けをする際の参考資料とするために回答カテゴリーの例を作成した。それぞれについて、VRM (Stiles, 1992) の“情報（客観的情報を与える）”，“開示（考えや意見を言う）”，“質問（質問する）”，“応答（相づちをうつ）”の4カテゴリーに対応させて第1著者が独自に作成した。作成の際には先行研究（藤原・大坊，2010）で得られた初対面で同性同士の二者間会話データを参考にした。また、VRM (Stiles, 1992) を用いてカテゴリー分類を行った経験のある社会心理学専攻の大学生と大学院生の男性各1名ずつを対象に、提示されたメッセージや回答カテゴリーの例がVRM (Stiles, 1992) の各カテゴリーに相当することを確認した。その後、誤解をまねく可能性のある表現や意味内容が曖昧な表現については合議の末、修正を行った（Table 2）。

VRM (Stiles, 1992) の中から特にこの4カテゴリーを用いたのは、小川 (2008) の会話実験でこれら4つの使用頻度が有意に多かったためであった。また、提示されたメッセージが“応答”の場合は実際の会話場面においては不自然であり、回答者が混乱することが考えられた。そこで小川 (2008) を参考に、“応答”の前にくることが最も多い“開示”を先に配置することとした。つまり、“開示（自分）→応答（相手）→4カテゴリーを順位付け”という流れとした。各対象者には、提示されたメッセージの全てに対して回答カテゴリーの順位付けをするよう求めた。回答された順位が1位であれば、実際には最も発言の優先順位が高いという意味になる。これを分析に反映させるため、1

Table 2
用いた提示されたメッセージと回答カテゴリーの例

提示されたメッセージ		回答カテゴリーの例	
カテゴリー	内容	カテゴリー	内容
情報	出身は大阪なんですよ	情報	私も大阪出身です
		開示	大阪は華やかですね
		質問	ずっと大阪ですか？
		応答	そうですか
開示	コタツが恋しい季節になりましたね	情報	昨日コタツ出しました
		開示	コタツが良いですね
		質問	コタツ出してますか？
		応答	そうですか
質問	何かバイトはしていますか	情報	バイトしてますよ
		開示	バイト面白いですね
		質問	バイト面白いですか？
		応答	そうですか
応答	最近朝がつらいですよ → そうですね (応答では先に開示が提示された)	情報	今朝、二度寝しました
		開示	二度寝が好きなんです
		質問	二度寝してしますか？
		応答	そうですか
なし		情報	雪が降ってますね
		開示	雪が好きなんです
		質問	雪は好きですか？
		応答	そうですか

位のカテゴリーは4点, 2位のカテゴリーは3点, 3位のカテゴリーは2点, 4位のカテゴリーは1点とした。

結果と考察

感情状態と社会的スキル得点の平均値 話者の感情状態や社会的スキルについて各表情群の間で差が生じていた場合, これらの要因の効果が相手の表情の効果と交絡する可能性が考えられる。そこで, あらかじめ表情間で感情得点や社会的スキルの得点に差がないことを確認するために, 各変数について表情間で平均値の検定を行った。相手の表情別の調査対象者の各感情得点については, 活動的快 (笑顔: $M=2.24$, $SD=0.72$; しかめっ面: $M=2.23$, $SD=0.71$), 非活動的快 (笑顔: $M=2.72$, $SD=0.62$; しかめっ面: $M=2.52$, $SD=0.72$), 抑うつ・不安 (笑顔: $M=2.69$, $SD=0.77$; しかめっ面: $M=2.73$, $SD=0.71$), 倦怠 (笑顔: $M=2.75$, $SD=0.76$; しかめっ面: $M=2.72$, $SD=0.78$) であった。なお, 非活動的快のみ表情間で有意な差となる傾向がみられたものの, いずれの感情得点についても表情間の差は有意ではなかった ($t(156) < 1.87$, $ps > .06$)。また, KiSS-18の得点についても相手の表情画が笑顔の場合 ($M=54.63$, $SD=11.14$) としかめっ面 ($M=54.13$, $SD=10.70$) の場合で有意な差はみられなかった ($t(156) = 0.29$, $n.s.$)。これにより,

話者の感情状態についてのベースラインの差や社会的スキルの差という別の要因が交絡する可能性は十分に低いことが示された。

回答カテゴリーの分布 会話行動の検討としてまず, 選択された各回答カテゴリーの順位について度数を示す (Table 3)。Table内のそれぞれの値は当該順位で選択された度数を示す。

Table 3からは, 文脈ごとに選択されやすいカテゴリーがあることが分かる。たとえば, 相手の表情に限らず, ほとんどの回答者において提示されたメッセージの“質問”に対しては回答カテゴリーの“情報”が1位に選択されていた。質問—返答という会話構造上の結び付きは隣接ペア (Sacks et al., 1974) として一般的な会話の傾向とされることから, 文脈によって優先して選ばれる会話行動があることを示しているといえる。そのためTable 3の結果は, 提示されたメッセージと回答カテゴリーについて回答者がその内容を正確に読み取っていたことを示すものとして考えられる。

感情状態, およびその組み合わせとメッセージ選択の関連 次に, 本研究の主眼である話者の感情状態とその組み合わせが発話カテゴリーの順位付けに与える影響について検討する。そのため, 各対象者の回答した4つの感情状態 (活動的快, 非活動的快, 抑うつ・

Table 3
各カテゴリーの順位付けにおける度数

提示された メッセージ	回答 カテゴリー	相手の表情：笑顔				相手の表情：しかめっ面			
		順位				順位			
		1	2	3	4	1	2	3	4
情報	情報	43	25	8	5	49	18	7	3
	開示	5	5	37	34	4	12	37	24
	質問	14	30	30	7	10	38	22	7
	応答	19	21	6	35	14	9	11	43
開示	情報	10	32	25	14	14	24	26	13
	開示	44	15	18	4	34	23	17	3
	質問	12	29	29	11	12	28	29	8
	応答	15	5	9	52	17	2	5	53
質問	情報	75	4	2	0	70	3	4	0
	開示	3	40	29	9	2	31	35	9
	質問	1	32	42	6	3	33	32	9
	応答	2	5	8	66	2	10	6	59
応答	情報	50	21	9	1	42	21	12	2
	開示	2	28	44	7	10	20	43	4
	質問	25	31	20	5	21	34	17	5
	応答	4	1	8	68	4	2	5	66
なし	情報	65	11	3	2	56	15	6	0
	開示	1	11	64	5	3	16	57	1
	質問	15	54	11	1	18	46	13	0
	応答	0	5	3	73	0	0	1	76

不安、倦怠)と各回答カテゴリーについての順位付けの関連について、提示されたメッセージと相手の表情別にSpearmanの順位相関係数を算出した。また、算出された相関係数の z 変換を行い表情間における同等性の検定を行った (Table 4)。

本研究の目的を踏まえて、まず第一の基準として自身の感情状態と各カテゴリーの順位付けの有意な相関関係について着目する。Table 4においては、自身の感情状態と各カテゴリーの順位付けの間に有意な相関関係があまりみられなかった。特にこの傾向は相手の表情がしかめっ面の際に顕著であった。これらの結果は全ての会話行動が自身の感情状態に影響を受けるわけではないことを示している。Table 4で有意な相関関係を示していたのは、主に活動的快や非活動的快といったポジティブな感情と回答カテゴリーの“情報”であった。提示されたメッセージが“質問”と“なし”の場合には、回答カテゴリーの“情報”はポジティブ感情と有意な負の相関を示した。この場合の各回答カテゴリーの選択度数 (Table 3) をみると、“情報”が他のカテゴリーに比べて極めて高い頻度で1位に選択されていたことがわかる。“質問”に対する“情報”は隣接ペア (Sacks et al., 1974) として会話構造上の頑健なつながりであることから、こ

の文脈での“情報”が話者たちにとって一般的に優先される選択肢としてみなされていた可能性が考えられる。これに対してポジティブ感情は拡張的な思考を促す (Fredrickson, 2001) ことから、話者にとっては最も一般的な選択肢と捉えられたであろう“情報”をあえて優先的には選ばないという拡張的な関わり方を促したのかもしれない。反対に、提示されたメッセージが“質問”の場合には抑うつ・不安というネガティブ感情と“情報”は有意な正の相関を示した。つまり、ポジティブ感情とは反対に、最も一般的な選択肢として捉えられたであろう“情報”の優先度をネガティブ感情が高めた可能性が考えられる。さらに、回答カテゴリーの“情報”については提示されたメッセージが“開示”の場合にポジティブ感情と有意な正の相関を示していた。これについては、ポジティブ感情が話者の会話行動を促進することが示唆されている (藤原・大坊, 2010) ことから、自身の経験や知識についての発言である“情報”の優先度を高めたものと考えられる。その他の有意な相関関係としては、相手の表情が笑顔のとき、提示されたメッセージが“情報”の場合に倦怠と回答カテゴリーの“開示”が有意な負の相関を示し、“応答”が有意な正の相関を示した。これについては、話者のネガティブ感情は会話を回避させる

Table 4
表情間における対象者の感情状態と順位付けの関連およびその比較

提示された メッセージ	回答 カテゴリー	相手の表情：笑顔 <i>N</i> =81				相手の表情：しかめっ面 <i>N</i> =77				表情間の比較： <i>z</i> 値			
		自身の感情状態											
		活動的 快	非活動的 快	抑うつ ・不安	倦怠	活動的 快	非活動的 快	抑うつ ・不安	倦怠	活動的 快	非活動 的快	抑うつ ・不安	倦怠
情報	情報	.19	.01	.11	-.20	.04	.00	-.02	-.08	—	—	—	—
	開示	.14	-.08	.02	-.32**	.03	-.01	-.20	-.07	—	—	—	-1.62
	質問	.04	-.01	.01	-.02	-.18	-.01	.05	.02	—	—	—	—
	応答	-.17	.03	.01	.28*	.06	.02	.12	.07	—	—	—	1.32
開示	情報	.23*	.11	-.06	-.17	.16	.18	-.16	-.22	0.45	—	—	—
	開示	.00	-.07	.09	.07	-.01	-.11	-.14	-.14	—	—	—	—
	質問	-.13	-.09	.16	.04	-.08	.12	.12	.12	—	—	—	—
	応答	-.12	.03	-.08	.08	-.07	-.10	.13	.18	—	—	—	—
質問	情報	-.24*	.04	.22*	.16	.06	.14	-.14	-.20	-1.87	—	.227*	—
	開示	.17	-.07	.02	-.16	.16	.01	.00	-.02	—	—	—	—
	質問	-.14	.15	.00	.07	-.14	.02	.06	.17	—	—	—	—
	応答	-.01	-.18	-.09	.01	-.01	-.07	-.03	-.05	—	—	—	—
応答	情報	.03	.10	-.05	-.03	-.22	.04	.15	.17	—	—	—	—
	開示	.01	.13	-.02	-.01	.22	.07	-.06	.01	—	—	—	—
	質問	-.13	-.11	.12	.12	.05	-.05	-.09	-.14	—	—	—	—
	応答	.08	-.15	-.07	-.17	.01	-.06	-.03	-.04	—	—	—	—
なし	情報	-.19	-.24*	.09	.08	-.23*	-.04	.21	.12	0.28	-1.26	—	—
	開示	.07	.03	-.08	-.09	.15	.16	-.09	-.04	—	—	—	—
	質問	.08	.11	-.02	.06	.09	-.08	-.11	-.07	—	—	—	—
	応答	.03	.00	-.01	-.12	-.12	.03	-.01	.06	—	—	—	—

p* < .05, *p* < .01

とした先行研究 (Forgas, 2002) を支持するものであろう。特に笑顔の相手に対して回避を示したのは、相互作用を通じて相手のポジティブさを把握することで自身のネガティブさがより際立ってしまうことを避けようとしたためと予想される。

次に、第二の基準として、有意となったそれぞれの相関係数が相手の表情間で異なるかについて着目する。Table 4において得られた有意な相関関係は表情間を超えて一貫していなかった。すなわち、自身の感情状態と各カテゴリーの順位付けとの相関関係について、一方の表情では有意であっても他方の表情では有意でなくなっていた。また、これらの有意であった相関係数について同等性の検定を行った結果、提示されたメッセージが“質問”の場合の抑うつ・不安感情と回答カテゴリーの“情報”の相関係数が表情間に有意な差を示した。しかし、複数回の検定を行った中で有意差が生じたのが1組のみであり、偶然生じた有意差である可能性も否定することができない。つまり、研究1で得られた結果のみでは相手の表情が調整効果をもつことが明確に示されたとはいえ、相手の感情状態を踏まえた“話者間の感情状態の組み合わせ”の効果を主張する結果ではなかった可能性が考えられる。

しかしながら、研究1で得られた知見はあらかじめ作成した各カテゴリーに対する順位付けを強制的に促

すものであった。この方法は、対象者が回答する際の負担を軽減することにはなるが、対象者の自由な回答行動に対して制限を加えていることを意味する。こうした制限によって自身の感情状態の影響自体が弱まった可能性も否定できない。また、強制的な選択を行ったため、本研究の順位付けで回答された下位順位の発言が現実場面で実際に発言されるかは定かではない。そこでこれらの問題点を解決し、さらなる検討を行うために研究2では自由記述の回答による分析を行うこととした。

研究 2

研究2の目的は、話者の感情状態による自由記述への影響と、その影響に対する相手の感情状態による調整効果を検討することである。具体的には研究1と同様に、第一の基準として自身の感情状態と自由記述による回答との有意な関連を検討し、第二の基準としてその関連が相手の表情によって有意に異なるものになるかを探索的に検討する。

方 法

調査対象者 関西地方の男女大学生42名（男性15名、女性27名）を対象とした。男性は平均年齢21.4歳 (*SD*=0.9)、女性は平均年齢21.3歳 (*SD*=1.3)、

全体では平均年齢21.3 ($SD=1.2$) であった。調査は2010年7月下旬に実施した。

手続き 研究1と同様に、対象者にはまず感情状態と社会的スキル尺度について回答を求めた。次に、初対面で同性の他者と会話している場面を想定するように求めた後で“以下のように他者が発言したとき、あなたはどのように反応しますか。”と紙上で教示し、自由記述による回答を求めた。また、提示されたメッセージについても研究1と同様に、相手の表情画の横に提示した。

感情状態と社会的スキルの測定尺度 研究1と同様に、回答時の感情状態を測定するために多面的感情状態尺度の短縮版(寺崎他, 1991)の活動的快、非活動的快、抑うつ・不安、倦怠、の4因子を用いた。また、社会的スキル尺度としてKiSS-18(菊池, 1988)を用いた。

相手の表情(感情状態) 相手の感情状態を表す表情については、研究1と同じものを用いた。また、各対象者につき1つの表情を割り当てた。

提示されたメッセージ 会話の文脈を明示化するために提示されたメッセージは、研究1と同様の形式で用いた²。また、研究2は自由記述による回答であるため回答カテゴリーやその例は用いず、Figure 1の右端にある吹き出しについては中を空白にして用いた。

結果と考察

感情状態と社会的スキル得点の平均値 研究1と同様の目的で、あらかじめ各表情群の間で感情得点や社会的スキルの得点に差がないことを確認するために、各変数について表情間で平均値の検定を行った。相手の表情別の調査対象者の各感情得点については、活動的快(笑顔: $M=2.40$, $SD=0.56$; しかめっ面: $M=2.38$, $SD=0.50$)、非活動的快(笑顔: $M=2.42$, $SD=0.57$; しかめっ面: $M=2.35$, $SD=0.74$)、抑うつ・不安(笑顔: $M=2.32$, $SD=0.51$; しかめっ面: $M=2.51$, $SD=0.72$)、倦怠(笑顔: $M=2.45$, $SD=0.52$; しかめっ面: $M=2.58$, $SD=0.56$)であった。なお、いずれの感情得点についても表情間で有意な差はみられなかった($t(40) < 1.00$, $n.s.$)。しかしながら、研究1とは異なりKiSS18の得点について相手の表情画が笑顔の場合($M=63.95$, $SD=8.91$)としかめっ面($M=57.57$, $SD=7.40$)の場合で有意な差がみられた($t(40)=2.54$, $p < .05$)。社会的スキルの程度によって感情状態とコミュニケーション行動の関連が異なる(藤原, 2010; 藤原・大坊, 2009)ことを考慮し、KiSS-18の得点を統制変数として扱い分析を行うこととした。

² 研究1では提示されたメッセージの“開示”を“コタツが恋しい季節になりましたね”としたが、調査実施の季節を踏まえて“蒸し暑い季節になりましたね”に変更した。

得られた自由記述のカテゴリー分類 得られた自由記述については、VRM (Stiles, 1992)を用いてカテゴリー分類を行った経験のある社会心理学専攻の大学院生の男性1名と第1著者によってVRM (Stiles, 1992)の8カテゴリーに分類され、その度数が算出された。しかし、小川(2008)と同様に“確認”、“指示”、“解釈”、“反射”についてはそれぞれ度数が1以下であったため、本研究の分析からは除外することとした。また、提示されたメッセージに対する記述数には各対象者によってばらつきがあった。記述数の多い対象者と一言しか記述していない対象者の回答ではそれぞれのカテゴリーにかかる重みが異なると考えられる。そのため、提示されたメッセージ別にカテゴリー総数を算出し、その値でカテゴリー度数を除することで重みづけした値を分析に用いることとした。

感情状態、およびその組み合わせと自由記述の関連 各カテゴリーの度数と感情状態との相関関係について相手の表情別に示す(Table 5)。ここでは、社会的スキルの程度によって自身の感情状態とコミュニケーション行動の関連が異なる(藤原, 2010; 藤原・大坊, 2009)ことから、表情間でみられた社会的スキル得点の有意差を考慮してKiSS-18の得点を統制変数としたPearsonの偏相関係数を算出した。また、研究1と同様に算出された相関係数の z 変換を行い、表情間における同等性の検定を行った。

まず、第一の基準として自身の感情状態と重みづけした自由記述との有意な相関関係について着目する。Table 5においては自身の感情状態との有意な相関関係が各カテゴリーに対する順位付け(Table 4)に比べて多くみられた。これらの結果は、強制選択による順位付けよりも回答者が自由に回答を記述する方が相対的に感情状態との関連が得られやすいことを示している。つまり、与えられたカテゴリーについて優先順位を選択するといった回答者の任意性が低いプロセスよりも、対象者が自由に回答を行うといったプロセスの方が自身の感情状態との関連が得られやすいことを示唆しているといえよう。また、Table 5ではTable 4と異なり、“開示”や“質問”が感情状態と有意な相関を示す傾向にあった。これについても、対象者が自由に回答を行う方がより自然に会話場面を想起しやすく、自分の意見や考えを言ったり相手に発言を求めたりするような親密なやりとりと感情が関連しやすかった可能性が考えられる。

具体的な相関関係に着目すると、提示されたメッセージが“情報”の場合、相手の表情が笑顔のときにはポジティブ感情である非活動的快と“質問”に有意な正の相関関係がみられた。これに対して、相手の表情がしかめっ面のときにはポジティブ感情の活動的快が“質問”と有意な負の相関関係を示した。これについては、こちらと同様に相手がポジティブ感情を抱い

Table 5
表情間における対象者の感情状態と自由記述の関連およびその比較
(KiSS-18得点を統制変数としたPearsonの偏相関係数)

提示された メッセージ	分類	相手の表情：笑顔 N=19					相手の表情：しかめっ面 N=23					表情間の比較：z値			
		度数	自身の感情状態				度数	自身の感情状態				活動的 快	非活動 的快	抑うつ ・不安	倦怠
			活動的 快	非活動 的快	抑うつ ・不安	倦怠		活動的 快	非活動 的快	抑うつ ・不安	倦怠				
情報	情報	13	.20	.14	-.01	-.06	19	.11	-.12	.09	.04	—	—	—	—
	開示	4	.17	-.04	.03	-.19	6	.23	.07	.11	-.06	—	—	—	—
	質問	10	.09	.49*	-.09	-.28	16	-.50*	.04	.14	.19	1.90	1.49	—	—
	応答	16	-.10	-.48*	.15	.26	16	.19	-.03	-.23	-.12	—	-1.47	—	—
開示	情報	2	.08	.06	-.15	-.11	1	-.17	.14	.07	-.31	—	—	—	—
	開示	17	.13	-.07	.29	-.36	23	-.57**	-.31	-.10	.23	2.31*	—	—	—
	質問	2	.58*	.61**	-.18	-.24	0	.	.	.	.	—	—	—	—
	応答	16	-.41	-.15	-.06	.25	15	.46*	-.02	.05	-.07	-2.78**	—	—	—
質問	情報	20	.08	-.09	-.20	.16	23	.08	.07	.13	.20	—	—	—	—
	開示	2	-.07	-.42	.27	-.64**	6	.07	.07	.02	.14	—	—	—	-2.71**
	質問	9	-.04	.35	.03	.23	10	-.27	.02	-.22	-.25	—	—	—	—
	応答	0	.	.	.	.	1	.29	-.35	.12	-.23	—	—	—	—
応答	情報	3	.40	.24	-.07	-.20	2	-.10	.25	-.19	.06	—	—	—	—
	開示	16	.34	.26	-.42	-.07	16	.30	-.34	.37	.19	—	—	—	—
	質問	5	-.33	-.19	.40	.41	13	-.25	.23	-.29	-.20	—	—	—	—
	応答	1	-.02	-.03	.52*	.08	0	.	.	.	.	—	—	—	—
なし	情報	4	.22	.25	.22	-.29	6	-.27	.20	.06	-.10	—	—	—	—
	開示	7	.18	.06	.00	.39	7	-.14	.25	.00	.28	—	—	—	—
	質問	10	-.31	-.03	.15	-.23	13	.42*	-.32	-.12	-.36	-2.32*	—	—	—
	応答	10	-.02	-.15	-.24	-.08	10	-.34	.02	.16	.31	—	—	—	—

* $p < .05$, ** $p < .01$

ていれば会話も活発になることが予想されることから、その後の相互作用を予期させる“質問”を促したのに対し、相手がネガティブ感情を抱いていれば会話は不活発になることが予想されるため“質問”を抑制したものと考えられる。同様に、相手の表情が笑顔のときには提示されたメッセージが“開示”の場合に活動的快および非活動的快は“質問”と有意な正の相関関係を示していた。その他の有意な相関関係についても、相手の感情状態が類似であるかどうかによって会話の積極性が左右されるという観点から考察できる。たとえば、提示されたメッセージの“情報”や“応答”に対する“応答”や、提示されたメッセージの“質問”に対する“開示”に着目する。相手の表情が笑顔のときには、相手と同様のポジティブ感情である非活動的快は“応答”を抑制することで積極的な会話を促したと考えられる。その一方で、相手とは異なるネガティブ感情である抑うつ・不安は“応答”を促し、倦怠は“開示”を抑制することでポジティブ感情を示す相手との会話を避けたことが考えられる。反対に、相手の表情がしかめっ面のときには不活発な会話が予想される。そのため、話者のポジティブ感情である活動的快は提示されたメッセージが“開示”の場合に“開示”を抑制し“応答”を促すことで積極的な関

わりを避けたと考えられる。しかしながら、提示されたメッセージがない場合には相手の表情がしかめっ面の場合に“質問”と活動的快に有意な正の相関がみられた。この結果については以降の不活発な相互作用を避けるのとは反対の結果である。提示されたメッセージがなく話者の方から話しかける場合には、相手に発言を求めてみることでその後の相互作用が本当に不活発になるのかどうかの展望を得ようとしたのかもしれない。

このように研究2では研究1よりも多くの有意な相関関係がみられた一方で、各カテゴリーの度数に着目すると度数が2以下といった少ないものも散見される。これらについてはカテゴリー自体がほとんどみられていないことを意味するため、相関係数の有意性も割り引いて考えておく必要があるといえよう。

次に、第二の基準としてそれぞれ有意であった相関係数が相手の表情間で有意に異なるかについて着目する。Table 5において得られた有意な相関関係については、表情の種類を超えて一貫して有意なものはなかった。つまり、自身の感情状態と自由記述の回答が一方の表情では有意な相関関係にあっても、他方の表情ではそれらは有意でなくなっていた。加えて、表情間で同等性の検定を行った結果、対象とした7つの

相関係数のうち半数以上である4つが有意な差を示した³。以上の結果は、一方の表情において自身の感情状態と自由記述の回答が有意な相関係数を示しており、さらにその上で有意であった相関関係が表情間で有意に異なるものになっていたという点で本研究の検討基準にかなうものであった。つまり、研究2で得られた結果は、自身の感情状態と会話行動との関連に対して相手の感情状態が調整効果をもつという意味で“話者間の感情状態の組み合わせ”の効果を示す結果であると考えられる。

総合考察

本研究の目的は、話者の感情が会話行動に与える影響について検討し、さらにその上で相手の感情がもつ調整効果について検討することであった。そのために場面想定法を採用して会話行動に着目し、研究1では与えられた発話カテゴリーに対する順位付けについて、研究2では自由記述による回答について、自身の感情状態との関連が相手の表情によってどのように変化するかについて探索的な検討を行った。その結果研究1においては、自身の感情状態とカテゴリーの順位付けにいくつかの有意な相関関係がみられた。その中には、隣接ペア (Sacks et al., 1974) とされる質問－返答 (本研究ではVRMにおける“質問”に対する“情報”) という会話行動についても話者の感情状態との有意な相関関係がみられていた。会話構造上の頑健なつながりとされる発話ペアについても感情の影響がみられたことは、会話行動の展開が構造的側面だけではなく話者の心理的側面によっても規定されることを示唆している点で興味深い。しかしながら、これらの有意な相関係数について表情間で有意な差がみられたのは1組のみであった。これに対して研究2においては、自身の感情状態と自由記述の回答における相関関係について半数以上で表情間に有意差がみられた。これらの結果は、自身の感情と会話行動との関連に対して相手の感情状態が調整効果をもったという意味で“話者間の感情状態の組み合わせ”の効果を示す結果であると考えられる。従来の研究では感情に影響された個人がいかに振る舞うのかに重点が置かれていた (e.g., 和田, 1986) ことを踏まえると、本研究で得られた知見は対人場面を対象とした感情研究に対して拡張をもたらすものと考えられる。

ここで、得られたいくつかの有意な相関関係を統合的に説明する観点として、ポジティブ感情と社会的行動の関連について動機づけの視点から考察した快楽的随伴性理論 (the hedonic contingency theory; Wegener & Petty, 1994) が当てはまると考えられる。

この理論では、ポジティブ感情を抱いた人はそのポジティブ感情を維持するために社会的行動に動機づけられると仮定している。たとえば研究2 (Table 5) において表情間で有意差を示した相関関係では、相手の表情が示す感情状態と話者の感情状態が異なることで“開示”を控えて“応答”を促していた。これらについては、感情状態の異なる相手との会話は不活発になることが予想されるため、会話を避けることで自身のポジティブ感情状態の維持を図ったためと考えられる。しかしながら、提示されたメッセージのない場合には、相手の表情がしかめっ面であるにも関わらずVRM (Stiles, 1992) の“質問”と活動的快は有意な正の相関関係を示していた。これについてはポジティブな感情状態の維持という観点からの説明は難しい。つまり、全ての有意な相関関係が快楽的随伴性理論 (Wegener & Petty, 1994) によって説明できるわけではない。また、“質問”については多くの場合に以後の相互作用を予想させる会話行動と考えることができるものの、“情報”や“開示”、“応答”については本研究の文脈中のみで意味を断定するのは慎重になるべきである。たとえば、本研究で用いたVRM (Stiles, 1992) の“応答” (Table 2) は、その場しのぎのための反応として捉えることもできるが、文脈によっては相手の発言を傾聴する相づちとして捉えることができるかもしれない。こうした相づちは相手に対する好意につながる (川名, 1986) ことから、本研究の解釈とはまた異なる意味が生じうる。そのため、なぜ研究1や研究2においてこれらの会話行動と自身の感情状態との有意な相関関係が得られたのかを厳密に議論していくためには、さらなる知見の蓄積が不可欠であるといえよう。たとえば、本研究では初対面の同性同士の会話場面を設定して網羅的・探索的に検討を行ったが、会話相手の性別や親しさ、会話の目的などを細かく設定していくことで当該状況において会話行動がもつ意味を明確化することは可能である。このように条件設定を細かく定めて仮説検証的な検討を行うことで、なぜ感情が特定の会話行動とだけ関連を示すのか、あるいはなぜ感情との関連がみられにくい会話行動があるのかといった会話行動と感情のつながりを支える内的プロセスを検討していくことは今後の課題であろう。

なお、本研究にも知見の一般化に際していくつかの限界がある。1つ目は、取り扱ったメッセージ数がそれぞれにつき1つであったため、特定の文章に対する反応となった可能性が残る点である。本研究で採用した提示されたメッセージ (研究1, 2) および回答カテゴリーの例 (研究1) は、先行研究 (藤原・大坊, 2010) で得られた初対面の話者同士による会話データを基に抽出したため、会話場面における特異なメッセージになっているとは考えにくい。また、回答

³ 一方の表情で感情と自由記述に有意な相関がみられたものの、他方の表情で自由記述が得られなかったものについては同等性の検定は行わなかった。

の際の工夫として回答カテゴリーの例は括弧内に書くなど（研究1）、あくまでカテゴリー判断としての回答を促した。しかしながら、これらの提示されたメッセージや回答カテゴリーの例がカテゴリーとしてではなく、その中の特定の文章として影響を与えていた可能性は否定できない。特に、本研究で用いた“質問”については、主に「はいーいいえ」で回答できるものであったため“情報”を返すことが隣接ペア（Sacks et al., 1974）となると考えられた。しかしながら、どのように思うかといった意見を聞くような場合には、客観的情報を提示する“情報”ではなく、自分の意見を発言する“開示”が隣接ペアとなることが予想される。この種の“質問”をVRM（Stiles, 1992）で考えると、発話内容が話者の経験に基づくものかどうかというSource of experience軸のOtherが、何か客観的なことではなく会話相手を指す場合として解釈できる。この場合、会話相手には自身の経験や知識について（Source of experience: Speaker）自身の枠組みで（Frame of reference: Speaker）発言することが求められるのである。このように、知見の一般化を図る上でも、様々なメッセージの場合について検討する必要がある。

2つ目は、場面想定法という方法論上の限界である。本研究では相手の感情状態との組み合わせを検討するためにあえて相手の感情状態を明示的にしやすい場面想定法を用いた。しかし、日本人は感情の表出が抑制的であるとされ（中村, 1991）、日常のコミュニケーション場面で他者の感情状態が明示されている場合ばかりではない。つまり、本研究で得られた知見はあくまで相手の感情が明示的である場合のものである可能性がある。場面想定法では、回答者に当該状況をよく説明した上で得られた回答が分析対象となるため、相手の感情を明示することなく、かつ異なる感情状態の話者同士を作り出すことはできない。今後の検討では現実場面を対象とした実験的検討が必要といえるであろう。加えて、場面想定法を採用したことにより本研究では対人コミュニケーション行動における非言語的側面の検討はできていない。会話行動に対して話者間の感情状態の組み合わせによる効果がみられたとしても、非言語的側面を含めた対人コミュニケーション行動全般についてはさらなる検討の余地がある。この意味においても、異なる感情状態にある話者を対象とした会話実験を行い、その様子をビデオ撮影し解析するなどした実験的検討が必要であると考えられる。

これらいくつかの限界はあるものの、本研究における知見は“話者の感情”の効果に加えて相手の感情状態を踏まえた“話者間の感情状態の組み合わせ”の効果を示すものであった。従来の研究では感情に影響された個人がいかに振る舞うのかに重点が置かれていた（e.g., 和田, 1986）ことを踏まえると、本研究で得ら

れた知見は対人場面を対象とした感情研究に対して拡張をもたらすものと考えられる。しかしながら、本研究の主眼はあくまで“どのような”会話行動の変化がみられるかにあった。今後は“なぜ”会話行動の変化がみられるのかについてさらに検討する必要がある。そしてその上で、これらの変化が対人場面においてどのような意味をもつのかについても十分に議論を展開していく必要がある。今後さらなる研究の発展が期待される。

引用文献

- Berry, D. S., & Hansen, J. S. (1996). Positive affect, negative affect, and social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 796-809.
- Carnevale, P. J. D., & Isen, A. M. (1986). The influence of positive affect and visual access on the discovery of integrative solutions in bilateral negotiation. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **37**, 1-13.
- Daibo, I. (1981). The role of anxiety trait and communication medium in dyadic conversation. 山形大学紀要（教育科学）, **7**, 589-604.
- Ekman, P. (1992). An argument for basic emotions. *Cognition & Emotion*, **6**, 169-200.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1971). Constants of across cultures in the face and emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **17**, 124-129.
- Forgas, J. P. (2002). Feeling and doing: Affective influences on interpersonal behavior. *Psychological Inquiry*, **13**, 1-28.
- Fredrickson, B. L. (2001). The role of positive emotions in positive psychology: The broaden-and-build theory of positive emotions. *American Psychologist*, **56**, 218-226.
- 藤原 健 (2010). 2者間コミュニケーションにおける感情表出の制御—社会的スキルの観点からの実験的検討— 第26回ファジィシステムシンポジウム講演論文集, 1043-1048.
- 藤原 健・大坊郁夫 (2009). 会話行動における覚醒度の異なるポジティブ感情の機能—社会的スキルに着目した検討— 日本感情心理学会第17回大会発表論文集, 247.
- 藤原 健・大坊郁夫 (2010). 覚醒度の異なるポジティブ感情の対人会話場面における機能—会話満足度、および手の動きについての検討— 感情心理学研究, **17**, 180-188.
- 川名好裕 (1986). 対話状況における聞き手の相づちが対人魅力に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **26**, 67-76.
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店
- Kuppens, P., Oravecz, Z., & Tuerlinckx, F. (2010). Feelings change: Accounting for individual differences in the temporal dynamics of affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **99**, 1042-1060.

- Larsen, R. J., & Diener, E. (1987). Affect intensity as an individual difference characteristic: A review. *Journal of Research in Personality*, **21**, 1-39.
- 中村 真 (1991). 情動コミュニケーションにおける表示・解釈規則 大阪大学人間科学部紀要, **17**, 115-146.
- 小川一美 (2008). 会話セッションの進展に伴う発話の変化—Verbal response modesの観点から— 社会心理学研究, **23**, 269-280.
- Russell, J. A. (1980). A circumplex model of affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 1161-1178.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, **50**, 696-735.
- Stiles, W. B. (1992). *Describing Talk: A Taxonomy of Verbal Response Modes*. Newbury Park, CA: Sage.
- 高橋雅延 (2002). 感情の操作方法の現状 高橋雅延・谷口高士 (編) 感情と心理学—発達・生理・認知・社会・臨床の接点と新展開— 北大路書房 pp. 66-80.
- 寺崎正治・古賀愛人・岸本陽一 (1991). 多面的感情状態尺度・短縮版の作成 日本心理学会第55回大会発表論文集, 435.
- 和田 実 (1986). 好意, 対人距離および話題が非言語的行動と自己開示に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **26**, 1-12.
- 渡邊伸行・鈴木竜太・山田 寛 (2006). 表情認知に関わる顔の視覚的構造変数の再検討 認知心理学研究, **3**, 167-179.
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. (1988). Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 1063-1070.
- Wegener, D., & Petty, R. (1994). Mood management across affective states: The hedonic contingency hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 1034-1048.
- Yamada, H. (1993). Visual information for categorizing facial expression of emotions. *Applied Cognitive Psychology*, **7**, 257-270.

(2010年12月27日受稿, 2011年9月14日受理)